



▲認定書を交換する茂里工学部長とスギオノ学長
右端は中村泰夫領事

はつと

工学部では、本年五月三十日インドネシア国スラバヤ工科大学 (Institute Technology Sepuluh Nopember、以下ITSと略称) において、スギオノ (Sugiono) 学長、茂里一統工学部長が議定書を交わして学部間協定を締結した。

ITSからは各学部長や教官らが、広島大工学部からは私のほか、菊地義弘教授(原動機工学)、山下英生教授(回路・システム工学)、舩岡弘勝教授(化学工学)、秋本良彦事務長及び染井哲志課長補佐らが、国際協力研究科からは斎藤公男教授(開発技術)が出席した。また、産業界からも小倉理一氏(西日本流体技研)、富久尾義孝氏(郵船海洋科学)らが出席した。さらに、在スラバヤ総領事館中村泰夫領事の臨席も頂き、厳粛な中にもなごやかな雰囲気での締結式がとり行われた。

スラバヤ工科大学との学部間交流協定

—工 学 部—

運動システム講座

◆ 小 瀬 邦 治

スラバヤ工科大学の概要

スラバヤ工科大学は、インドネシア第二の都市スラバヤ市にあって、一九五七年十一月スカルノ初代大統領により創立されたことに始まる。一九六〇年に国に移管され国立大学になるが、当初は土木、機械、電気、化学及び造船学部から構成されていた。一九七三年から四期五か年計画による長期発展計画が実施され、一九八二年アジア開発銀行からの融資を得て新しいキャンパスを完成させた。その他、OECF(海外経済協力基金)、ドイツ、日本からの資金援助により建物や実験施設の充実が計られている。一九八三年から学部構成が、数理学部、産業技術学部、土木・計画学部、海洋学部になり、現在、学生総数は、付設の専門学校を入れて約一万人、教員数は、約千三百人である。

学部は学科により構成され、全部で十七学科がある。
①数理学部(物理学科、数学科、統計学科、化学科、社会科学及び人間学科)
②産業技術学部(機械工学科、電気工学科、化学工学科、物理工学科、産業工学科、計

- ③土木・計画学部(土木工学科、建築学科、衛生工学科)
- ④海洋学部(造船工学科、船用機械工学科、海洋工学科)

交流協定締結を
検討するに至った経緯

工学部では、従来より継続的にITSの卒業生を大学院に受け入れ、現在そのうち十五名がITSの教官として活躍している。

教官の相互訪問は、一九七五年に頼實正弘元学長、佐々木和夫、吉田典可元工学部長のITS訪問によって始められ、最近では、昨年四月に日下部治教授が東南アジア學術調査の目的でITSを訪問され、また七月には私と斎藤教授が造船業及びその教育の実態調査を目的としてITSを訪問し、教育研究施設を視察するとともに、今後の學術交流についてスギオノ学長(当時、副学長)をはじめ多くの教官らと意見交換を行った。また、ITSからも昨年十一月末に、スギオノ学長、シャ

リフディン(Syarifuddin Mahmudsyah)

産業技術学部長、スウェーデン(Swafley)前海洋工学部長らが来学され、工学部及び国際協力研究科の関係教官らと學術交流について具体的な打合せを行い、今回の調印に至った。

交流の継続発展への展望

ITSとの間にはすでに長年にわたる強い交流実績があり、交流協定の締結により一層の進展がはかれるものと考えられる。茂里工学部長は、この点を踏まえて締結式で、「交流協定はよく姉妹協定ともいわれるが、今回の協定はむしろ広島で学んだ子供たちの前で晴れて結婚式を迎えた夫婦のようなもので、これからも優秀な子供を多く生み、育てよう」と挨拶された。

今後の継続的交流の進展をはかるため、交流協定締結を機に相互に世話人会(代表スギオノ学長(ITS側)、小瀬(広大側))を発足させた。ITSについてはインドネシアの工業と教育研究の質的向上に対する協力を進める場合、単に大学教育に目を向けるだけでなく、産業界との結びつきについても十分考慮しながら取り組む必要がある。すなわち、当面は両校間の人的交流や教育研究における協力を推進するが、スラバヤ地区には既に多数の日本企業が進出しており、産業界を含む多面的な交流を目指す必要がある。

また、アジア発展途上国の開発協力に貢献できる人材育成を目的として、昨年本学に発足した国際協力研究科の本協定への参加も期待される。

(こせ・くにじ)